「見えない」イランのクルド人問題
――その歴史的背景をさぐって――

山口昭彦

●イランのクルド人問題の特異性

近年、トルコやイラクに加えシリアのクルド人の動向にも関心が集まるなか、イランのクルド人が話題に上ることはあまりない。イランにも数百万規模でクルド人が暮らすにもかかわらず、である。

その背景には、歴史的経路の違いがある。トルコ、イラク、シリアがいずれも第一次世界大戦後、オスマン朝（1300年頃～1922年）が崩壊するなかで成立した新興国家であるのに対し、領域国家としてのイランは16世紀以降、徐々に形成されてきた。国家形成をめぐるこの違いが、クルド人問題の性格にも影響を与えてきたのである。以下、イラン革命期までのクルド人をめぐる動きをたどりながら、この問題を考えたい。

●シーア派国家イランの形成

イランという地理的概念は古代にまでさかのぼりうるが、いまにつながる領域国家としてのイランはサファヴィー朝（1501～1722年）によって基礎がおかれた。政治的に分裂していたイラン高原を統一しシーア派を国教と定めたのが、この王朝である。

王朝建設の原動力となったのは、サファヴィー教団と呼ばれる神秘主義教団のもとに集まったトルコ系諸部族であった。かれらの軍事力を背景に権力を握ったサファヴィー朝は、各都市のペルシア系官僚家系に徴税業務などを委ねることで体制を固めていった。

当時、クルディスタン各地には部族が割拠していたが、サファヴィー朝が成立し、西からオスマン朝が勢力を広げると、クルディスタンは両者が対峙する場となった。そして、現在のイラン西部国境あたりで両帝国の境界が形成されると、その東にあったクルド系諸部族の首領たちは、知事職を与えられてサファヴィー朝支配を受け入れていった。17世紀になるとクルド系諸部族のなかからも王朝権力の中枢に食い込んで高い地位を得るものが現れるなど、クルド系でもイラン国家の担い手となりうることが共通認識になっていった。

19世紀半ば、イランの支配王朝はカージャール朝（1796～1925年）へと替わっていたが、この頃から中央政府による地方支配が強まり、クルド系諸部族の首領たちは退けられ、替わって中央から知事が派遣されるようになった。ただしこの時点では、知事は替わっても、それを支える行政機能は、在地の事情に通じたクルド系官僚名家の手に残っていた。

●パフラヴィー朝による国民統合

第一次世界大戦後、カージャール朝に替わってパフラヴィー朝（1925～79年）が登場すると、事態は大きく変化した。国王レザー・シャーは、集権的体制を確立すべく国内各地の部族集団への統制を強化し、クルド系諸部族の首領たちも拘束し監視下においていった。加えて、イラン人意識を植え付けるために、本来は多様な民族集団からなる国民にペルシア語教育を強制し、同化政策を推進するようになった。

こうした政策はクルド地域においても少なからぬ反発を生み、それがクルド民族主義思想と結びついていった。クルド民族主義はすでに19世紀末からオスマン朝下のクルディスタンを中心に広がりはじめたが、とくにイギリス委任統治下のイラクでは、クルド語による出版活動も行われていた。遅くとも1940年代に入る頃には、そうしたクルド語出版物が、密輸品とともにイランのクルド地域にも持ち込まれて、若者たちの間で密かに読まれるようになっていった。

●自治政府クルディスタン共和国の樹立と挫折

第二次世界大戦最中の1941年8月、ソ連とイギリスがそれぞれ北と南からイランに侵攻した。レザー・シャーは退位を余儀なくされ、息子モハンマド・レ

ザーが即位したものの、国内政治は安定せず、他方で、中央政府の弱体化により重しのとれた地方では、さまざまな動きが起こった。とくにクルド地域では、自治を要求する運動が大きなうねりとなっていった。

主要都市の1つマハーバードでは、クルディスタン復興委員会（コマラ）という地下組織が作られ、周辺のクルド地域にも組織網を広げていった。1945年8月にコマラが改組してクルディスタン民主党が結成されると、同党を基盤に翌年1月には自治政府クルディスタン共和国の樹立が宣言された。しかし、軍事的防波堤となっていたソ連軍が5月に撤退すると、年末には国軍がマハーバードに到来し、運動は終焉を迎えた。

ここで注意したいのは、運動ではあくまでもイランの枠内での自治が求められたという点である。独立という選択肢が現実性をもたなかったのも事実だが、それに加えて、数百年にわたってイランの一部であり続けたことも一定の作用を果たしていたと思われる。

●雌伏の時代からイラン革命へ

1979年のイラン革命は、クルド人にとっても千載一遇のチャンスであった。すでに1971年、カリスマ的指導者アブドッラフマーン・ガーセムルーがイラン・クルディスタン民主党の主導権を掌握していた。革命が成就するや、党は他の組織とともにクルド地域を掌握し、革命政権に対して自治を要求した。

しかし、ホメイニー政権は自治の付与はもとより、民族的権利に理解を示すこともなかった。クルド人側はテヘランに代表を派遣して交渉を試みたが、むしろ革命政権とクルド諸勢力との緊張は高まる一方だった。そして、1980年、ついに武力衝突へと突入し、クルド地域は政府の管理下へとおかれていった。

イラン＝イラク戦争（1980～88年）終結後、イラン・クルディスタン民主党は政府との和平交渉に入ったが、1989年7月、ウィーンでの交渉の席でガーセムルーが射殺され、さらに1992年9月、後継者サーデク・シャラフキャンディーもまたベルリンで凶弾に倒れた。2度にわたって指導者を失ったイラン・クルディスタン民主党は、急速に弱体化していった。

●歴史的資産をどう生かすか

イランにとって、多様な民族を含みながらも長い時間をかけ主体的に国家の枠組みを作り上げてきたという事実が、トルコやイラクにはない、国民統合の有効な資産となってきた。クルド地域でも在地エリートを支配機構のなかに緩やかに包摂しながら統治を行ったことで、カージャール朝時代までは中央＝地方関係に一定のバランスが保たれ、イランの一部としての意識はクルド社会のエリート層にも概ね共有されていた。

ところが、パフラヴィー朝時代に始まった強引な集権化や同化政策は、こうしたバランスを崩すものとなった。結果、イラクなどでのクルド民族主義運動に刺激を受けながら、イランのクルド人の間でも、現状を民族的抑圧とみなし、クルド文化の保護やクルド語での教育、さらには自治を求める動きが出てきたのであった。その頂点が、クルディスタン共和国の樹立であり、また、イラン革命直後の自治要求運動である。

いまイランのクルド地域を歩いてみると、政治的に安定し経済的にも一定の活況を呈しているようにみえる。武力闘争も表だったものはほとんどない。人々はクルド語を自由に話し、クルド語出版物も出回っている。クルド語によるテレビやラジオもある。たしかに、イランではクルド人問題がみえにくい。

しかし、実際には、イランのクルド人の間にも少なからぬ不満が広がっている。「国はクルド人を人間とは見ていない、自分たちペルシア民族のことしか考えていない」という声さえ聞く。不信感の背景には、政治的・文化的制約に留まらず経済的停滞や失業率の高さなどさまざまな要因があろうが、それらがみな民族的抑圧という認識へと結びついているのである。イラン人としての誇りはなおもちながら、クルド人としては差別を受けているという鬱屈した不満があるのだ。

ロウハーニー現政権になって、少しずつ変化が起こってはいる。クルド地域の中心都市サナンダジュにあるクルディスタン大学では、クルド語教育やクルド文学研究が認められるようになった。10年前、ハータミー政権下で求めたものが、ようやく実ったという。歴史的資産を生かしながら、こうした変革を今後も実行していけるかどうかが、イランのクルド人問題の今後の展開や、多民族国家イランの将来にも大きく関わっていくのは間違いないであろう。

（やまぐち　あきひこ／聖心女子大学文学部教授）